説教20220717創世記18：1-15ルカ10：38-42「笑いがみちるとき」

今日のルカ福音書で、マリアはイエス様の足元に座って、その話に聞き入っている一方で、マルタは、多くのことに思い悩んで心を乱しています。それで、私たちは、マリアはイエス様から良しとされ、マルタはイエス様からとがめられたのだから、自分たちもマリアのようにしようと思うのですが、その思いには、多分に、この世の道徳的な判断が混ざっているように思われます。

例えば、想像力を働かせてストーリーを考えますと、こんな風にマリアがイエス様の話に聞き入っていることのきっかけが、このマリアがイエス様の処に走り寄って、マルタのことを告げ口したことにあったとしたらどうでしょうか。

こうなると、私たちの道徳的な判断はすぐさまくつがえり、なんだマリアもマルタと同じようなものではないか、となるわけです。

私たちは、この個所を読む時、この様に道徳的な判断を持ち込みますと、神学的な本質が見えなくなってしまいます。この個所で聖書が語っていることは、単純に言えば、イエス様に近寄り、御言葉を聞くことが善であり、反対に、イエス様から遠ざかり御言葉を聞かないことが悪、ということです。

ですから、イエス様のそばに近寄ったマルタは、その時点でイエス様から良しとされたのです。興味深いのは、マルタがイエス様に近寄った動機というのが、マルタのことを告げ口するという、人間的に見ればよくない動機だったということです。しかし、イエス様はどういった動機であれ、近寄って来る全ての人を歓迎し、よしとされるのです。イエス様に近寄って来る人の中には暴力的な人もいました。６月26日の説教で出て来ました、ゲラサ人は「夜も昼も墓場や山で叫び続け、石で自分の体を傷つけていて、イエスを遠くから見ると、走り寄ってひれ伏し、「いと高き神の子イエス、構わないでくれ。後生だから、苦しめないでほしい」と大声で叫んだのですが、そんな礼儀も作法も知らないゲラサ人をイエス様は良しとされて、彼を癒されたのでした。それはなぜかというと、彼がなりふり構わずとにかくイエス様のもとへと近寄ったからであります。

考えてみれば、私たちはお行儀よく、イエス様のお話を聞こうと思ってイエス様に近づくものでしょうか。まあそういうときもあるかも知れませんが、多くの場合、この世で、イエス様の言葉に飢え、どうしてもイエス様の言葉を聞きたくて彼のもとへ走りよるのではないでしょうか。そして現実的に言えば、多くの場合、私たちがイエス様に訴えかけるのは、この世での嘆きの数々であり、人の至らないことに対する非難であり、どうしようもない自分の怒りや悲しみの表明であったりするでしょう。

実は、イエス様はそのような私たちをこそ待っておられるのです。皆様、キリエ・エレイソンという祈りをご存知でしょうか。日本語で言えば「主よ、私を憐れんで下さい」という祈りです。とても短い祈りですが、この祈りはとても大切で、私たちが忘れてはならない欠かすことが出来ない祈りです。イエス様は、この世で傷つき嘆き悲しんでいる私たちが、身元へと近づき、なりふり構わず思いをぶちまけて、憐れみを求めてくれることを望んでおられます。

多くの詩編もこの自らの嘆きを主なる神にぶつけるという嘆願という形をとっています。

（詩編13編 3節）

いつまで、わたしの魂は思い煩い／日々の嘆きが心を去らないのか。いつまで、敵はわたしに向かって誇るのか。

わたしの神、主よ、顧みてわたしに答え／わたしの目に光を与えてください／死の眠りに就くことのないように

敵が勝ったと思うことのないように／わたしを苦しめる者が／動揺するわたしを見て喜ぶことのないように。

さて、皆さま、もうお気づきのこととは思いますが、私たちが、こうして憐れみを求めて、近づく相手というのは、ただイエス様お一人であります。もし、私たちがマリアなどの人間に近づいて、嘆きをぶちまけて直言しようものなら、マリアとマルタの中は引き裂かれ、事態は悪化することでしょう。

実にわかり易いことです。私たちが抱え持っている苛立ちや嘆きや悪い心、悲しみなどは、イエス様の御そばに駆け寄り、憐れみを求め、御言葉を聞く事で、イエス様の御言葉によって解決が図られるということなのです。

さて、今日の創世記の箇所でも、アブラハムとサラという夫婦は、主なる神の身元に居ます。この時は、３人の旅人の姿をした三位一体の神様が、訪ねて来て下さったわけですが、それまでには、この老夫婦が「キリエ　エレイソン」「主よ私を憐み下さい」という祈りをし続けてきたことが思われます。そして、訪ねて来た主なる神の前でもサラの嘆きは続きます。「自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いている」これがサラの嘆きです。サラは歳を取り、月のものもとうになくなっていました。

でも、訪ねて来た主なる神は、サラにとって訳の分からないことを言います。「わたしは来年の今ごろ、必ずここにまた来ますが、そのころには、あなたの妻のサラに男の子が生まれているでしょう。」

この主なる神の御言葉を聞いて、サラはひそかに笑いました。ひそかにというのは、「腹の中で」とも訳せますが、とにかく、サラはこの言葉に笑ってしまったのです。しかし、誰にもその笑いを悟られたくなかったのです。ここに、この時のサラの閉じられた心が示されています。サラは「自分は年をとり、もはや楽しみがあるはずもなし、主人も年老いている」と日々嘆いていたのでしょうが、かといってその心境を心開いて誰かにぶちまけるということは最早なかったのでしょう。１６章にはサラが、腹違いの子供を産んだハガルにつらく当たる、つまりいじめたことが記されていますが、年老いたこの時のサラには自分の嘆きをこの様に他者にぶちまける元気もなくなっていたのでしょう。そうしてサラの心は閉ざされました。

この時、神に対しても人に対しても心を閉ざしているサラは実に、孤独であったのではないでしょうか。

詩編25編 16節

御顔を向けて、わたしを憐れんでください。わたしは貧しく、孤独です。

意外なことに、孤独という言葉は聖書おいて３ケ所しか出て来ませんが、それは、現代社会において孤独という言葉が多用され、孤独が世界を覆い、全ての人が孤独ということに直面せざるを得ない現代社会の特質を、かえって際立たせています。

幸いなことに、この時孤独であったかも知れないサラのもとには、主なる神ご自身が訪ねて来て下さったのです。でも、サラは心を閉ざし心を開こうとはしませんでした。

13節からの経緯を読みますと、そんなサラの心を何とかこじ開けようとする主なる神と、サラとの間の葛藤が読み取れます。主はアブラハムを話に加わらせ、彼に「なぜサラは笑ったのか。なぜ年をとった自分に子供が生まれるはずがないと思ったのだ。主に不可能なことがあろうか。」と一種の告げ口をします。主なる神は、サラが腹の中で笑ったことをお見通しだったのです。

サラは、恐ろしくなりました。そして「わたしは笑いませんでした。」という言葉が口をついて出て来ました。主なる神は言いました。「いや、あなたは確かに笑った。」

サラは全てをお見通しである主が恐ろしくなり、神に対して心を閉ざしている自分のことを振り返らざるを得なかったでしょう。

コヘレトの言葉/ 03章に次のような御言葉が記されています

何事にも時があり／天の下の出来事にはすべて定められた時がある。

泣く時、笑う時／嘆く時、踊る時

この時のサラは、泣くときにあったのでしょうか、あるいは笑う時にあったのでしょうか。微妙です。両者の過渡期にあったと言えるかもしれません。

この時一人で人知れず笑っていたサラは、この後、息子イサクを与えられ「神はわたしに笑いをお与えになった。聞く者は皆、わたしと笑い（イサク）を／共にしてくれるでしょう。」と言って、皆と共に笑う時に入れられました。

このような主なる神が約束されている笑う時、を私たち人間はどのように迎えることが出来るのでしょうか。アブラハムとサラに起こった出来事に即して考えてみましょう。

アブラハムはかつて主なる神から言われました。「いや、あなたの妻サラがあなたとの間に男の子を産む。その子をイサク（彼は笑う）と名付けなさい。わたしは彼と契約を立て、彼の子孫のために永遠の契約とする。」と。そして彼はこの御言葉を信じました。アブラハムは主なる神から離れませんでした。一方、サラはといいますと、彼女の心は閉ざされ、彼女は主なる神から離れていました。

この二人の有様は、冒頭で語ったマリアとマルタの話に比べられるかもしれません。マリアもイエス様を離れず、マルタはイエス様を離れていたのでした。

でも、いずれの場合も、そこに主イエスがやってこられて、いつしか全ての人が、主イエスに引き寄せられ、主イエスの御言葉を聞く者とされたのでした。

この成り行きを考えてみますと、私たちが主イエスに寄り頼み「キリエ・エレイソン」「主よ、私を憐れんで下さい」と祈る祈りが、全く神と私の一対一の、個人的で祈りでありながら、同時に、皆で集まって共同で捧げられる、共同の祈りでもあるということに気付かされます。

「主よ、私を憐れんで下さい」という祈りは、自分自身の孤独や苦しみから救われる為の個人的な祈りで始められることが多いでしょう。しかし、そんな祈りに応えられ、救いの御言葉を与えられる主イエスは、私たちの個人的な救いの喜びを、自ずと、共同の分かち合える笑いへと変えて下さるのです。

ここで私たちは「笑いが満ちる時がやってくるように、主に憐れみを求めて、共にお祈りしましょう。」というお祈りも出来るでしょう。それはどんなことがあっても折れることがない、全ての個人的な嘆き悲しみを引き受けて下さる主イエスに共に近づき、主イエスに信頼して、主イエスという唯一無二の伴侶を得るということです。

この世の道徳に基準を置いていますと、私たちは、悲しみを笑いに変えて下さる源である、主イエスに近づくことが出来ません。あれをしても大丈夫だろうか、これをしたら怒られないだろうか、などどこの世的な事でためらっていると、主イエスは遠ざかっていきます。そして、個人は分断され、私たちはますます孤独にされていくことでしょう。

どうか私たちは、イエス様に向かって嘆き悲しみ、イエス様に憐れみを求め、イエス様によって悲しみを喜びへと変えて頂きます様に祈りながら、新たな一週間に踏み出して参りましょう。

祈ります

天の父

私たちはこの世にあって苦しんでいます。どうか私たちを憐み、助けて下さい。

孤独に満ちたこの世で、私たちは憐れむことから遠ざけられ、悲しみの時を過ごしています。どうかそんな私たちをあなたが憐れんで下さり、私たち一人一人の内に笑いの種を植え、笑いが満ちる時を備えて下さい。

必要なことはただ一つとあなたは言われます。私たちがこの世にあって心騒がせることなく、常にその必要な御言葉に耳を傾け、それに聞き従って行くことが出来ますように。

私たちは、御言葉なしに、永遠の命に至る道を歩むことできません。どうか、御子イエスが御自身の死と復活を以って示して下さったその御言葉を、唯一無二の伴侶として、最後まで歩んで行くことが出来ますように。

父と聖霊と共に